待　つ（太宰治）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

ア省線のそのA小さい駅に、私は毎日、人をおィムカえにまいります。誰とも、分からぬ人を迎えに。

市場で買い物をして、その帰りには、必ず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰を下ろし、買い物籠をゥ膝に乗せ、ぼんやり改札口を見ているのです。上り下りの電車がホームに到着するごとに、たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、一様に怒っているような顔をして、パスを出したり、ェキップを手渡したり、それから、（　1　）脇目もォフらず歩いて、私の座っているベンチの前を通り駅前の広場に出て、そうして思い思いの方向に散って行く。私は、ぼんやり座っています。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。胸が、どきどきする。考えただけでも、背中に冷や水をかけられたように、（　2　）して、息が詰まる。けれども私は、やっぱり誰かを待っているのです。いったい私は、毎日ここに座って、誰を待っているのでしょう。どんな人を？いいえ、私の待っているものは、人間でないかもしれない。私は、人間を嫌いです。いいえ、怖いのです。人と顔を合わせて、お変わりありませんか、寒くなりました、などとB言いたくもない挨拶を、いい加減に言っていると、なんだか、自分ほどのうそつきが世界中にいないような苦しい気持ちになって、死にたくなります。そうしてまた、相手の人も、むやみに私を警戒して、当たらず障らずのお世辞やら、もったいぶったうその感想などを述べて、私はそれを聞いて、相手の人のけちな用心深さが悲しく、いよいよ世の中が嫌で嫌でたまらなくなります。世の中の人というものは、お互い、こわばった挨拶をして、用心して、そうしてお互いに疲れて、一生を送るものなのでしょうか。私は、人に逢うのが、嫌なのです。だから私は、よほどのことでもない限り、私のほうからお友達の所へ遊びに行くことなどは致しませんでした。家にいて、母と二人きりで黙って縫い物をしていると、cいちばん楽な気持ちでした。けれども、いよいよ大戦争が始まって、D周囲がひどく緊張してまいりましてからは、私だけが家で毎日ぼんやりしているのが大変悪いことのような気がしてきて、何だか不安で、ちっとも落ち着かなくなりました。身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ちなのです。E私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまったのです。

家に黙って座っていられない思いで、けれども、外に出てみたところで、私には行くところが、どこにもありません。買い物をして、その帰りには、駅に立ち寄って、ぼんやり駅の冷たいベンチに腰かけているのです。どなたか、（　3　）現れたら！　という期待と、ああ、現れたら困る、どうしようという恐怖と、でも現れたときにはしかたがない、その人に私の命を差し上げよう、私の運がそのとき決まってしまうのだというような、諦めに似た覚悟と、そのくせ他さまざまのけしからぬ空想などが、異様に絡み合って、胸がいっぱいになり窒息するほど苦しくなります。生きているのか、死んでいるのか、分からぬような、白昼の夢を見ているような、何だか頼りない気持ちになって、眼前の、人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界が（　4　）なってしまうのです。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二　波線部A「小さい駅」の様子から、この時代の人々はどのような状況にあると考えられるか。適当なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　どこに逃げるべきか悩み、切羽詰まっている。　**イ**　人に対して疑心暗鬼になり、こわばっている。
ウ　各々の仕事と義務感に追われて、焦っている。　**エ**　不安を隠して、他人への親切を心がけている。

問三　波線部B「私」が「言いたくもない挨拶を、いい加減に言って」しまうのは、相手に対するどのような心持ちからか。それを端的に示した部分を本文中から五字以内で探して書き抜きなさい。

問四　波線部C「いちばん楽な気持ち」だったのはなぜか。適当なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大好きな縫い物に没頭すれば、何も考えなくてよいから。　**イ**　自分の責務を果たしているという安心感があるから。
ウ　世の中の人との関わりがなく心が乱れることがないから。　**エ**　「母」は「私」の性質を考慮して接してくれるから。

問五　波線部D「周囲」とほぼ同じ意味で用いられている言葉を本文中から三字で探して書き抜きなさい。

問六　波線部E「私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまった」のはなぜか。説明しなさい。

問七　空欄部**1**～**4**に当てはまる語を、次の**ア**～**オ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　ぞっと　**イ**　シンと　**ウ**　ひょいと　**エ**　そそくさと　**オ**　はらはらと

問八　この小説の作者について、次の問いに答えなさい。

1　作者名を答えなさい。

2　この作者と関連の深い事柄とその作品を、次の**ア**～**キ**の中から三つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「事項」　**ア**　新感覚派　**イ**　第三の新人　**ウ**　桜桃忌　**エ**　白桜忌　**オ**　無頼派

B「作品」

カ　芥川賞
ア　「或る女」
カ　「人間失格」

キ　文学界
イ　「それから」
キ　「山椒魚」

ウ　「多情多恨」

エ　「斜陽」

オ　「走れメロス」

問八	問七	問六	問四	問二	問一
1	1				ア
	2		問五	問三	イ
2	3				ウ
A					
	4				エ
B					
					オ

学年
組
番号
氏名
得点

待　つ（太宰治）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、漢字の書き取りと読み。問二、駅の人々の様子から、背景である社会の様相を推察する。問三、前後の照応からの内容理解。問四、問三と関連づけて考える。問五・問六は、言動から心理の動きをつかむ。本文中の表現を使って説明できるかどうかを問う。問七、文脈の的確な読み取りを、言葉の使い方から確認する。問八、文学史的理解。

☆解答例と配点

問一　**ア**　しょうせん　　**イ**　迎　　**ウ**　ひざ　　**エ**　切符　　**オ**　振　〈2点×5〉

問二　ウ〈4点〉

問三　用心深さ〈4点〉

問四　ウ〈4点〉

問五　世の中〈4点〉

問六　大戦争が始まり、家で縫い物などをしているだけでは、お役に立てないと感じたから。〈10点〉

問七　1　エ　　2　ア　　3　ウ　　4　イ　〈2点×4〉

問八　1　太宰治　　2　A　ウ・オ・カ（完答）　B　エ・オ・カ（完答）　〈2点×3〉

計50点

待　つ（太宰治）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50 点］

省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎えにまいります。誰とも、分からぬ人を迎えに。

市場で買い物をして、その帰りには、必ず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰を下ろし、買い物籠を膝に乗せ、ぼんやり改札口を見ているのです。上り下りの電車がホームにアトウチャクするごとに、たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、①一様に怒っているような顔をして、パスを出したり、切符を手渡したり、それから、そそくさと脇目も振らず歩いて、私の座っているベンチの前を通り駅前の広場に出て、そうして思い思いの方向に散って行く。私は、ぼんやり座っています。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。胸が、どきどきする。考えただけでも、背中に冷や水をかけられたように、ぞっとして、息がイツまる。けれども私は、やっぱり誰かを待っているのです。いったい私は、毎日ここに座って、誰を待っているのでしょう。どんな人を？いいえ、私の待っているものは、人間でないかもしれない。私は、人間を嫌いです。いいえ、怖いのです。人と顔を合わせて、お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を、いい加減に言っていると、なんだか、自分ほどのうそつきが世界中にいないような苦しい気持ちになって、死にたくなります。そうしてまた、相手の人も、むやみに私を警戒して、②当たらず障らずのお世辞やら、もったいぶったうその感想などを述べて、私はそれを聞いて、相手のけちな用心深さが悲しく、いよいよ世の中が嫌で嫌でたまらなくなります。世の中の人というものは、お互い、こわばった挨拶をして、用心して、そうしてお互いに疲れて、一生を送るものなのでしょうか。A私は、人に逢うのが、嫌なのです。だから私は、よほどのことでもない限り、私のほうからお友達の所へ遊びに行くことなどは致しませんでした。家にいて、母と二人きりで黙ってウヌい物をしていると、いちばん楽な気持ちでした。けれども、いよいよ大戦争が始まって、周囲がひどく緊張してまいりましてからは、私だけが家で毎日ぼんやりしているのが大変悪いことのような気がしてきて、何だか不安で、ちっとも落ち着かなくなりました。身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ちなのです。私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまったのです。

家に黙って座っていられない思いで、けれども、外に出てみたところで、私には行くところが、どこにもありません。買い物をして、その帰りには、駅に立ち寄って、ぼんやり駅の冷たいベンチに腰かけているのです。どなたか、ひょいと現れたら！　という期待と、ああ、現れたら困る、どうしようという恐怖と、でも現れたときにはしかたがない、その人に私の命を差し上げよう、私の運がそのとき決まってしまうのだというような、諦めに似た覚悟と、その他さまざまのけしからぬ空想などが、異様に絡み合って、胸がいっぱいになりB窒息するほど苦しくなります。生きているのか、死んでいるのか、分からぬような、エ白昼の夢を見ているような、何だか頼りない気持ちになって、眼前の、人のオ往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまうのです。ああ、私はいったい、何を待っているのでしょう。ひょっとしたら、私は大変淫らな女なのかもしれない。大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設けて、自身のC軽はずみな空想を実現しようと、何かしら、よい機会をねらっているのかもしれない。ここに、こうして座って、ぼんやりした顔をしているけれども、胸の中では、不埒な計画がちろちろ燃えているような気もする。

いったい、私は、誰を待っているのだろう。はっきりした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争が始まってからは、毎日、毎日、お買い物の帰りには駅に立ち寄り、この冷たいベンチに腰をかけて、待っている。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいったい、私は誰を待っているのだろう。旦那さま。違う。恋人。違います。お友達。嫌だ。お金。まさか。亡霊。おお、嫌だ。

もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの。何だか、分からない。たとえば、春のようなもの。いや、違う。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やっぱり、違う。ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍らせて待っているのだ。眼の前を、ぞろぞろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠を抱えて、細かく震えながら一心に一心に待っているのだ。私を忘れないでくださいませ。毎日、毎日、駅へお迎えに行っては、むなしく家へ帰ってくる二十の娘を笑わずに、どうか覚えておいてくださいませ。Dその小さい駅の名は、わざとお教え申しません。お教えせずとも、あなたは、いつか私を見かける。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二　傍線部①「一様に」、②「当たらず障らず」の意味をそれぞれ答えなさい。

問三　波線部**A**「私は、人に逢うのが、嫌なのです」とあるが、なぜか。その理由を二つ、それぞれ四十字以内で説明しなさい。

問四　波線部**B**「窒息するほど苦しくなります」とあるが、なぜか。

問五　波線部**C**「軽はずみな空想」とほぼ同じ意味で用いられている言葉を、本文中から五字以内で探して書き抜きなさい。

問六　波線部**D**「その小さい駅の名は、わざとお教え申しません」とあるが、なぜ教えないのか。その説明としてふさわしくないものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　待つ行為そのものも目的になっており、待つ対象に確実に会いたいわけではないから。

イ　待っている人やモノが、自らの力で「私」のもとに辿りつくことを期待しているから。

ウ　わざと教えないことで、待っている人を困らせたいといういたずら心があるから。

エ　「私」が待ち続けているように、待つ対象にも「私」に会う努力を続けてほしいから。

問七　「私」が自身の姿を自嘲的に語っている部分を、本文中から三十字程度で抜き出しなさい。

問七		問五	問四	問三				問二	問一
				2		1		①	ア
									イ
		問六							
									ウ
								②	
									エ
									オ

学年
組
番号
氏名
得点

待　つ（太宰治）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、漢字の書き取りと読み。問二、語句の意味。問三、前後の照応からの内容理解。問四、問三と関連づけて考える。本文中の表現を使って説明できるかどうかを問う。問五、、前後の照応からの内容理解。問六は、言動から心理の動きをつかむ。問七、文章表現に着目する。

☆解答例と配点

問一　**ア**　到着　**イ**　詰　**ウ**　縫　**エ**　はくちゅう　**オ**　おうらい　〈2点×5〉

問二　①　同じように　②　どれに対しても差し障りがないように　〈2点×2〉

問三　・言いたくもない挨拶をする自分を、ひどいうそつきのように感じて苦しいから。（三十六字）
・お世辞やうその感想を聞くと、相手のけちな用心深さを感じて悲しくなるから。（三十六字）〈6点×2〉

問四　待つ人が現れることへの期待や恐怖、運命に対する諦めに似た覚悟、その他の空想などが絡み合って、胸がいっぱいになるから。〈10点〉

問五　不埒な計画〈4点〉

問六　ウ〈4点〉

問七　毎日、毎日、駅へお迎えに行っては、むなしく家へ帰ってくる二十の娘（三十二字）〈6点〉

計50点